
強姦 転落人生

愛知時報

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

強姦 転落人生

【Nコード】

N9331H

【作者名】

愛知時報

【あらすじ】

ごく普通の男が酒に酔った勢いで女子大生を強姦してしまい、人生を滑り落ちていく物語

〜狂気の夜〜

俺の名前はヤスハル

会社帰りにいつもの様にいきつけ（と言っても月に一度程度）の居酒屋で飲んでいたら日の出来事だった…

「ヤスくん大丈夫？もう帰った方がいいよ」大将が言う…

その日はビールを数杯飲んだ後に普段は好んで飲まないウイスキーを4杯も飲んでた。

「なんでえ？」

「なんでもクソもないよお飲めもしないウイスキーなんか飲んでさ、あの娘たちも帰ったしさ、そろそろヤスくんも帰りなよ」

その日は客がいっぱい、ひとつだけ空いていたカウンターになんとか座らせてもらったのだ

そのカウンターの隣の席にいた、まだ10代とも見れるギャル2人
一人で飲むのも嫌いじゃないが、せっかく隣り合わせになっただ話し掛けないわけがない

「すごいっ若いのにウイスキー飲むんだあ？」

彼女たちの飲んでたグラスを指して突然に話し掛けてみた

「…うん、ソーダ割りだけど…、最近また流行り出してるとだよ？」

「おっなかなかの反応」

「そうなんだあ？じゃあ大将っ俺もひとつちようだい、ハイボール
ね」

そんな調子で1時間ぐらい彼女たちの楽しく飲んでいた

く魔く

「なんでもクソもないよお飲めもしないウイスキーなんか飲んでさ、あの娘たちも帰ったしさ、そろそろヤスくんも帰りなよ」

そう、俺は飲めもしないウイスキーのせいでカウンターで寝てしまっていたのだ

「あれ？あの娘たち帰っちゃったの？」

「帰ったつてば、ヤスくん」

「ごちそうさま」つて伝えてくれつてよ
なぜか怒つた様な口調で大将が言つた

酒の勢いとは怖いもので、俺は彼女たちの分も奢つてやると言つたらしい

「チツつまんねえな、まあいいや 大将勘定してよ」

そう言つと俺は、彼女たちの分も合わせて1万9千円を支払つて店を出た

「でも、あいつら可愛いかつたなあ」

歩いている途中、店で会つた彼女たちのことを思い出し下半身がムラムラしてくるのを感じた

そう言えばここしばらく女には全く縁がなかつたのだ

「くそつ居酒屋であんな金使うならヘルスにでも行つた方がマシだ

ったぜ」

イライラ、ムラムラしながら家路につく

街灯もまばらな裏道を右へ左へとフラフラしながら歩き続ける

川沿いの道へ差しかかった時だった

10代後半ぐらいの女が携帯を片手に川沿いの道へ歩いていった

薄いピンクなキャミソールにチェック柄のミニスカート肩からはブルンドらしきバッグを下げていた

いつもならなんでもないこの風景だが、この日の俺は言葉では表現できない緊張にも似た感情を覚えた

気がつくと俺は、その娘の後ろを静かに追いはじめていた ゆっくりと近づく様に…

く行動く

ゆっくりと近づいてから横に並ぼうとした最後の2、3歩はわざと音を立てて駆け寄った

「ねえ、どこ行くの？」

軽い感じで話し掛けたが女は携帯を操作したまま、びっくりした顔をして一度俺の顔を見た

「ねえどこ行くのってば？ちょっとだけ話しようよ？」

そう言いながら俺は体半分を女の前に被せ、向かい合うように後ろ向きに歩きながら続けて言う

「ねえなんで話してくれないの？もしかして彼氏とかいるの？」

女は横目俺を見ながらコクリとうなづく

「じゃあさ、番号だけでも教えてよ？また今度でいいから遊ぼうよ？」

話し掛ける俺をかわす様にして女は歩き続け、遂には後ろ向きで歩く俺の横を足早に過ぎていった時だった

バンッ！

俺は後ろ姿の女の肩を勢いよく両手で掴んだ

「やつ… なにつ？」

驚いて振り返る女の腰に手を回し、無理矢理に抱き寄せて少し強い口調で言った

「ほら…ちゃんと声だせるじゃん？」

その時俺は、今まで味わったことのない様な興奮状態の中にいた
もう自分では止められないと思った…
もうい後には引けないと思った…

「ちよっ… なに… 本当にやめてよ 怖い…」

恐怖からなのか声にならない声で女が言った

俺はその声を掻き消す様に、女の小さな唇を無理矢理奪って さらに抱き寄せたのだった

《こうなればもういくとこまでいくしかない》

心の中で悪魔がそう言った…

支配

もう今更やめられない

そう思った俺は、女の肩から強引にキャミソールを下ろし、あらわになった白い花柄のブラジャーの上から身体のわりに大きめな谷間に顔をうずめた

「いや… ちよっ…」

途切れ途切れの女の声が更に俺を興奮させた

「ああ？別に初めてじゃねーんだろ？黙ってヤラせりゃいいんだよ！」

自分でも驚くほど自然に出た脅迫めいた言葉

おそらくアダルトビデオで聞いた台詞を覚えていたのだろう

片手でブラをズリ上げてこぼれ落ちた胸に必死で吸い付いた

まるで乳首を噛み切ってしまうように荒々しく歯を立てながら吸い舐める

「いやぁ 本当にやめて お願いだから やめて」

「ここまでやってやめれるか どうせお前は警察行くんだろ？それならもう同じだ」

「言わないから！警察にも誰にも絶対言わないから 本当にやめて！」

半裸状態の女は声を張り上げ必死に懇願してきた

「大きな声を出すんじゃないよ わかった じゃあ口でしてくれよ やったことあるだろ？ フェラチオだ」

目に涙を浮かべた女に条件とばかりにフェラチオを要求した

「やめてほしけりゃ口でヤレよ」

「もう嫌 いやだあ そんなのしたくないっ」

目からはさつきまでとは違う大粒の涙をこぼしながら首を振って嫌がる

走って逃げ出すこともできず 目の前にいる強姦魔に対し泣きながら必死で

「やめて・お願い」と訴える女 このとき俺は支配感に満ちていた

「やらねえのか？」

泣き崩れ、肩で息をし始めた女に何度も聞く

「オイ？ どうすんだ？ やるのかヤラれるのか」

答えるはずのないことはわかっていた それでも追い詰めるように聞いた

～支配～（後書き）

どんなことでも結構です。皆様のご意見感想をお聞かせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9331h/>

強姦 転落人生

2010年10月20日20時03分発行